

芸人 光浦 靖子
みつうら やすこ

私たちは90年代 を生きるんだよね



1971年、愛知県生まれ。プロダクション人カ舎所属。幼なじみの大久保佳代子と結成したオアシズでデビュー。バラエティー番組、ラジオなどに出演するほか、舞台やコラム執筆など多岐にわたり活動。著書に『靖子の夢』(スイッチ・パブリッシング)、『ハタからみると、風日記』(毎日新聞出版)ほか多数。

彼

女は小学六年のとき隣のクラスに転校してきました。ショートカットの似合う、女子から見てもカッコいいと思うような子でした。すぐに人気者になった彼女に私は話しかけることもできず、廊下で歩く姿を、朝礼で隣の列に並ぶ姿を目で追っていました。

中学二年のとき同じクラスになり、私は彼女と仲良くなりました。私なんかを選んでくれるの？ すごく嬉しかったです。

中学生の女子はグループでわかれます。イケてるグループから地味なグループまで。彼女は、クラスでも一番目立たない子を「あいつ、面白いよ」と、グループの垣根なんか無視して仲良くしていました。なんでそんな子と？ 彼女に好かれてたくてその地味な子と接してみると、実際、面白

い……。目から鱗でした。面白いことを見つけるって、面白がるってすごい、と。もしかしたら、どこにでも転がってて、見つけた者も、見つけられた者もハッピーになる、すごいモノじゃないかって。お笑いの世

界のモノの見方によく似てると、後に知りました。中学三年のとき、彼女と些細なことでケンカし、口をきかなくなりました。もうこちらから折れることはできない、そんな意地の張り合いでした。そのまま高校三年間、違うクラスだったこともあり、よそよそしくすれ違うだけでした。私は彼女が好きでした。

90年代、私はひよんなことからお笑いの世界に入りました。毎日が刺激と興奮と悔し涙と自己嫌悪でした。共通の同級生から聞いたんです。彼女が「私たちは90年代を生きるんだよね」と高校を卒業するときに言っていた、と。又聞きその言葉が、なんかお守りのようになりました。予測もつかないこの流れに流されても、溺れねーぞ、と。彼女は私はどうなっても、面白がってくれる、と。その彼女は三十代後半、亡くなりました。話しかかった、聞いたかった山程のことはそのまま逃げとチャレンジの線引きがわからず、縮こまっている今の私を、彼女は面白がってくれるのかなあ。